慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「指定」を表す接辞性字音形態素について：「当」「本」「同」を中心に
Sub Title	
Author	張, 明(Cho, Mei)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2016
Jtitle	日本語と日本語教育 No.44 (2016. 3) ,p.134- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20160300-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』44：134（2016.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

「指定」を表す接辞性字音形態素について
―「当」「本」「同」を中心に―

張　　明

本研究は指定を表す接辞性字音形態素のうち、「当」「本」「同」を中心に、考察を進めた。ここで言う「指定」とは「不定の対象物のどれを具体的に指し示すのか、はっきりとわからせること」のように定義したものである。「指定」を表すことのできる接辞性字音形態素は「当―・本―・同―・各―・諸―・全―・前―・先―・昨―・現―・今―・次―・来―・明―・翌―・他―・某―」などが挙げられる。その中から、使用頻度が高いにもかかわらず、日本語学習者には十分に理解されていないと思われる「当」「本」「同」を取り上げることにした。

まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から採取した用例に基づき、「当」と「本」の後接語の性格と意味用法について考察した。

後接語の語種については、「当」も「本」も漢語・外来語・混種語・和語という順に語数が多いものの、後接語の意味分野については、それぞれに違いが見られる。『分類語彙表　増補改訂版』の部門から見ると、「当」については、「人間活動の主体」を表す後接語が半数以上の比率を占めているのに対し、「本」については、「人間活動精神および行為」を表す語がもっとも多い。

次に、「当」と「本」の機能を以下のように分析した。「当」の意味は「対人関係を感じた対象者に対して、発話者の自分側と関係している何かを改まりの気持ちで指すこと」のように結論づけた。一方、「本」は「同じ立場に立ち、心的距離が近い対象者に対して、発話者の自分側と関係している何かを改まりの気持ちで指すこと」のように結論づけた。両者は「発話者の自分側と関係している何かを改まりの気持ちで指すこと」という点で共通しているが、対象者の立場という点で異なる。「当」の対象者は発話者にとって対人関係として心的距離が遠い存在であるのに対し、「本」の対象者は発話者にとって同じ立場に立つ心的距離が近い存在である。

最後に、「ヨミダス歴史館」（読売新聞データベース）から「同」の用例を収集した。「同」の後接語の語種については、漢語と外来語が圧倒的に多い。後接語の意味分野については、「人間活動の主体」を表す後接語が半数以上の比率を占めている。また、「同」は「連体修飾用法」「記号化用法」「照応的指定用法」という三つの用法があることを指摘した。そのうち、本研究と関係している照応的指定用法を中心に、「基本的用法」「言語単位の拡張」「照応詞の部分利用」「照応詞の部分利用の上での言語単位の拡張」という四つの類型に分類し、「「同」と先行詞の関係」および「「同」を含む照応詞の言語単位」をめぐって、考察した。

結論として、先行詞に指示保証部がついているかどうかということが「「同」と先行詞の関係」と関わっており、指示保証部と拡張部の言語単位が「「同」を含む照応詞の言語単位」と関連しているということになる。

以上のように、「指定」を表す接辞性字音形態素「当」「本」「同」の性格を明らかにした。